学　位　論　文　要　旨

高等教育機関における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究
―国際環境人材育成事業の批判的検討―
A Study on Education for Sustainable Development (ESD) in Higher Education Institutions – Critical Analysis of International Environmental Leadership Development Programs in Japanese Universities

農林共生社会科学専攻　農林共生社会科学大講座
二ノ宮リム　さち

1980 年代以降「持続可能性」「持続可能な開発」の概念に注目してきた国際社会は、1990 年代に入るとその実現へ向けた教育の役割を重視し、「持続可能な開発のための教育(ESD)」の実現と推進へ向け議論や施策を展開してきた。2005 年には「国連 ESD の 10 年」が始まり取組が広がったが、しかし現在まで、ESD の主流化は実現していない。ESD は教育のあり方を見直し再方向づけるものとされ、高等教育機関はその主要な推進主体とされる。国内では、政策にもとづく高等教育の ESD が広がるが、それらを検討する研究は極めて限定的である。そこで本稿は、「ESD の 10 年」国内実施計画で重点的取組事項とされた、大学院生を対象とする国際環境人材育成事業に着目し、その批判的検討を通じて、大学院における ESD の実質的な進展へ向けた可能性と課題を明らかにする。

まず第 1 章で本稿の目的や構成を概説した後、第 2 章で先行研究を検討し、ESD に求められる特性を 8 つの観点―学習者の主体的参画、分野横断・学際性、実際の体験・経験、現実的課題への取組、地域への根ざし、ローカルとグローバルのつながり、多様な立場の人々の学びあい、継続的な学習の機会―から整理する。また、高等教育機関の ESD に関する国内外の議論と動向を概観し、ESD 進展には教育内容・方法の変革にくわえ組織・システムや諸活動を含む機関全体の変革が必要だが現実にはそれが広がっていないこと、実践の検証が求められることを確認する。また、特に大学院の ESD の意義と課題を整理する。

第 3 章では、全学的波及・継続や上記「ESD に求められる特性」の観点から、

対象事例の文部科学省「戦略的環境リーダー育成拠点形成事業」における１７採択大学の実践を横断的に検討する。その結果、取組の学内的波及は限定的で組織形態や権限、予算等の問題があること、既存学位課程への影響も限定的だが学位論文指導における変革の試みがみられることなどを確認する。また、専門教育と研究を主眼とする学位課程と、学際的教育と現場体験を重視するプログラムの連携、「現在学ぶ地域」と「修了後働く地域」に根ざす視点、国内外学生の学びあい、継続的学習機会の提供といった点から可能性と課題を確認する。これらを考察し、大学院の ESD 進展の鍵として「関係者の理解共有」「既存学位課程の変革」「『地域』の多様性と関連性への認識」「分野と国境を越えた学びあいの促進」を提示する。

続く第４章では、当該事業が重視する「現場体験」に焦点を絞り、一実施大学の履修生への聞取りを通じ、現場体験が大学院の ESD を実現する可能性と課題に関する具体的な検討を行う。先行研究を踏まえ「現場『のための』教育」という概念を提案した上で、学生の発言から、知識以外の多様な力の育成について検討する。その結果、「感情面」にくわえて「社会面」の学習の意義、体験する「現場」と自身が暮らす・働く「現場」の相違性・共通性・関連性に着目し学習を実社会としての現場に活かす視点の重要性を確認する。これを踏まえ、大学院において「現場のための教育」を推進する対策を、「『現場』を『持続可能な社会へ向けて行動する場』ととらえる視点」「学習者による学習の意味の理解と主体的な参画」「様々な感覚を通じた発見」「体験する『現場』と自身の『現場』の相違性・共通性・関連性への着目」の観点から提案する。

第５章では、前章で論じた「現場のための教育」を推進する上で重要となる、「教育・学習を学生と現場の『文脈』に位置づける」ことの可能性と課題について、上記事例の履修生に対する聞取り時の発言から検討する。先行研究から、学習者や現場の「文脈」に着目する意義と、文脈に根ざす「ローカルな知」の認識を通じた unlearn の重要性を整理した上で、発言を検討し、「現場の文脈の中でこそ豊かに実現する学習があり、その中では『ローカルな知』への気づきの意識化と共有が重要なこと」「科学知にもとづく専門教育と『ローカルな知』にもとづく現場体験を融合する必要があること」「将来の仕事の現場に学習を位置付けていく中でも『ローカルな知』に配慮する必要があり、働く現場を『持続可能性へ向けて』働く現場ととらえる視点が重要なこと」「修了後の継続教育・学習が必要なこと」「教育者にも新たな役割が求められること」を論じる。

最後に、第６章で上記の議論を総括し、高等教育、特に大学院における ESD の実質的な進展へ向けて、従来の組織・研究・教育を見直し、現実社会や学習者の文脈に根ざす「現場のための教育」としての現場体験を専門教育と融合させつつ、「学ぶこと」と「生きること」をつなげる教育を実現することの重要性を確認し、今後求められる研究の視点を提示する。